

---

# DOG DAYS ~ ~ ~ 蒼炎の勇者 ~ ~ ~

TE

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

## 【小説タイトル】

# DOG DAYS ～～～ 蒼炎の勇者～～～

〔ZΠ-γ〕

N  
7  
9  
7  
9  
V

【作者名】

TE

【おひさま】

この物語は異世界『フロニヤルド』の『ビスコツティ共和国』に召還された勇者シンク・イズミ。そして、とある事情で飛ばされた地球の史上最大のオンラインネットゲーム『The World』を救つた勇者カイト。この一人の勇者が奏でる物語

## EPISODE 1 『魔者誕生』（前書き）

（まぐれに書いてしまった小説です）

読んでくれたら嬉しいです

ここは『異世界』フローヤルド  
現在、『ガレット獅子団』が『ビスコッティ共和国』に『戦』を仕  
掛けている

『ビスコッティのみなさん、ガレット獅子団のみなさん、お待たせ  
しました!』

そんな戦にビスコッティ共和国代表領主、ミルヒオーレ・フィリア  
ンノ・ビスコッティ姫殿下がマイクを持ち話し始める

『近頃、敗戦続きな我らがビスコッティですがそんな残念展開は今  
日限りでおしまいです!』

姫殿下の話に戦をしていた戦士達が注目する

『戦』と言つても国交手段であると同時に、国民が参加して運動や  
競争を楽しむイベントもある

そんなビスコッティ共和国はミルヒオーレ（以後ミルヒ）の言つ通  
り、今、戦をしているガレット獅子団に敗戦続

そこでミルヒは最後の手段を使った

『ビスコッティに希望と勝利をもたらしてくれる素敵な勇者様が来  
てくれださいましたから』

その言つと空中に浮かぶモニターが一人の少年を映し出す  
両戦士達はそのモニターに釘付けだ

『華麗に鮮烈に、戦場に登場してもらいましょう!』

「ふつ！」

高台の上にいた勇者と呼ばれた少年がそこから飛び降りた  
その身のこなしから、勇者に相応しい身体能力であることがわかる

姫様からのお呼びにあずかり、勇者シンケ。ただいま見参!!

実況をしているフランボワーズ・シャルディの声が震える

『勇者降臨！－！』フローニャルドで國を治める王や領主のみが許された。勇者召還！』

「私も見るのは初めてです」

解説をしていて、バニー、エリザベス、将軍も物珍しそうに、勇者シンケを見ている。

『そう！そんな稀少な勇者が今、我々の目の前に現れましたあ！！』

勇者が現れたことに戦士達は大騒ぎ  
しかし、誰も気づいていなかつた。勇者は一人だけではなかつたこ  
とを

「う ううう ここは ？」

ここは戦場から少し離れた森の中  
そこには、赤い服と帽子を着た少年がいた

「なんで僕はここに ？確か そうだ。エリアの調査をしていたら 」

この少年の名前はカイト

地球の史上最大のオンラインネットゲーム『The World』の勇者、と人々から言われている  
そんなカイトが何故ここ（フロニヤルド）にいるのか、原因はわからぬ

「うーん ダメだ。思い出せない 」

頭に霧がかつたように思い出せないカイト

「とりあえず、ここがどこなのか調べないと 」

カイトは近くに落ちていた武器『英雄の双剣』を拾い手がかりを探し始めた

「これはまた、やるもんですな」

ガレット獅子団の本陣

ゴドワイン将軍とその隣にいる銀髪の少女はこのガレット獅子団の領主レオンミシェリ・ガレット・デ・ロワ（以後『レオ』）

二人はシンクの活躍を田の当たりにして大絶賛  
だが、そんな悠長にしている場合ではない

「ふん、面白い。どれ、一つ試してみるかの」

不敵な笑みを浮かべるレオは動き始める

「……………」

ガレット獅子団の戦士達がビスコッティ領地へと突撃する。だが、それを遮るように一人の縁髪の少女が立ちふさがる

「姫様の決断といえ、べつに勇者など居なくても……」

この少女はビスコッティ騎士団の親衛隊長『エクレール・マルティノッジ』（以後エクレ）  
ビクセラエクレは勇者召還を反対していたようだ

エクレの背後に光り輝く紋章が現れる

「裂空十文字！！」

エクレが持つ双剣から十字を描いた何かを撃ち放つ  
直撃した戦士達は爆風とともに『猫玉』になつて吹き飛ばされた

猫玉とはダメージを喰らつたり、頭や背中を触られるとノックアウト判定となり一定時間無力化となる。ちなみにビスコッティ側は『犬玉』

「せいやあーー！」

「ウフーー？」

爆風とともに起きた煙により生き残りがいたことに気づかなかつたエクレは油断していたため反応が遅れてしまった

「勇者キ~~~~ック！…」

「ぐはつ…？」

ピンチのときに現れる

まさに勇者のようなタイミングでシンクが参上  
横から不意打ちは勇者とは言えないと思つが

「オッス！勇者として喚んでもらいました。シンク・イズミです！」

「エクレール。騎士団の親衛隊長だ」

「エクレール、さつものスピードってやつぱり『あれ』？」

まるで漫画やゲームに出てきそうな技に興奮気味のシンク

「ビーー？『紋章砲』のことか？」

「それです！」

『紋章砲』とはフローニャルドの大地と空に眠るフローニャ力を集めて  
使う技術

「紋章砲の扱いはエクレールが上手だから、教えてもらひよつて姫様が」

「や、そつかー！」

一瞬、嬉しそうな表情をするエクレール

ミルヒに褒められたのが嬉しかったのだらつ

「まずは自分の紋章を発動させる」

「紋章発動！レベル1！」

「一人の手の甲から小さな紋章が現れる

「全身の力と輝合いを込めて紋章を強化！」

手の甲から背後へと移り大きくなつた

「レベル2」

「「レベル3！！」」

背後の紋章が大きくなり、その紋章がはつきり見えるようになる。  
力が大きくなつている証拠

「フローヤ力を輝に変えて自分の武器から撃ち放つ！」

「それが、紋章砲！？」

「「「つおりや あああああああつ……！」」

再びガレット獅子団の戦士達がシンク達に襲いかかる

「いやああああああああああつ……！」  
「はあああああああああああつ……！」

ドガアアアアアアアアンッ！…！…

二人の紋章砲がガレット獅子団の戦士達を蹴散らした  
まるで雨のように猫玉が降つてくる  
それほど二人の紋章砲は強烈なのだ

「紋章砲は便利だが、防具や甲冑を許された戦士長や騎士には防が  
れることが多い。それに何より　」

「撃つと結構疲れるね」

「よく考えて使え」

「ありがとうございます！頑張ります！」

信用していないのか険しい顔でシンクを見るエクレ

「あつ ！」

「なつ！？」

いきなりどこからかフロニーヤ力を纏つた弓矢がシンクを襲う

「うわっ！？」

「うわあああつ！？」

いち早く気づいたエクレは双剣で防ぐも、その威力に負けシンクとエクレは吹き飛ばされる  
それでもなんとか軌道をそらすことには成功  
その『矢は浮き島に当たった瞬間、べちゃっとガムのようになる。もし当たつていたら身動きがとれずその時点で負けとなつていただろ』

「ほんのちびつと期待して来てはみたが 所詮は犬姫の手下か」

「あつ！？ レオンミシェリ姫！？」

現れたのは巨大な鳥に乗つたレオがいた

「姫などと氣安う呼んでもらつては困るのう。我が名はレオンミシェリ・ガレット・デ・ロワ。ガレット獅子団領国の王にして百獣王

の騎士。閣下と呼ばんか。」の無礼者が！…！」

レオの紋章が光り輝く

その輝きは気高き王に相応しいものと宣言しようつ

『キタアアアアッ！来ました！…それはさておき、レオン//ショリ閣下！…戦場到着。愛騎ドーマも相変わらず凜々しい…』

「ふつはははは…それはさておき、ワシは先に進ませてもいいわう。はよおひー！」

レオは愛騎ドーマを操り先へと進む

「ちよひ、つわあ！」

先に進ませる訳にはいかないのだがさつきの衝撃でエクレに乗つかられる態勢となつており身動きがとれない

「勇者、邪魔だ！退け！」

「いや、そつちこねー！」

シンクはエクレをじかそつと手を伸ばすが

「うわあつーー..」

「えつ..あつ、『ねん』

咄嗟に謝るシンクだが、自分の手に感じの感触にてつの結論に基づいた

「 女の子?」

「あ、あつ ー?」

そのシンクの悪気のない一撃にエクレは固まってしまった  
しかし、それはすぐに怒りへと変わった

「 いの

「えつ  
?」

「スット『顎者があつーー..』

エーフォンシー！

「うわああああーーー！」

エクレのN女の一撃に吹き飛ばされる

『おおーと仲間割れか？そしてこの勇者、意外とアホかあ？』

アホなのだらう

ああ・・・

どうしよう・・・

まあ、いいか？

まだ他の小説も終わっていないのに投稿なんて・・・

すみません、冗談です

どうりも頑張りたいと思います

「撃てえ！！」

ビスコッティの弓矢部隊が着々と進むレオに向かって一点砲火

「ふんっ！！」

しかし、レオは慌てる事なく、箭を呼び出し回転せしむりで全ての弓矢を弾き飛ばす

その人離れした技術に唖然とする弓矢部隊

「たああああっ！！」

「「「『おやああああっ！！』」」

難無くと弓矢部隊を撃破するレオ

すぐさま難関である『すべすべ床のすり鉢エリア』

ここを抜ければ最終防衛戦まで後少し

「駆け抜けるぞ、ドーマ」

『クワッワ！』

「はこよおっ！」

レオはドーマの並外れた跳躍でエリアを飛び越そうとするが

「させるかああああああつ！！」

進ませる訳にはいかないシンクとエクレ。レオビーダーマの後を追い  
躍躍  
レオは前を向いて後ろががら空きで絶好のチャンス

「  
」

L

「「なつ！？」

武器を振り下ろすもレオはドームから降りてその攻撃を避ける

「ええいっ！！」

そのまま斧を取り出し反撃。その反撃に対応できなかつた二人は直撃し吹き飛ばされる

「くつ  
勇者、お前はなんなんだ！戦いの邪魔をしにきたのか？！」

「せつ、せつちこや！僕の」

「「？」

言い争う一人だが、レオはそれを黙つて見ているつもりはなかつた斧を高々と振り上げ紋章が背後に浮かび上げフローニャ力を集めるレオ

それは明らかに危険な雰囲気を醸し出していた

「じうおおおおおおおおりやあ……」

レオは斧を地面へと振り下ろす

ガキインと金属音とともに紋章が浮かび上がる

「獅子王炎陣」

レオの回りから火柱が上がり、空からは火の玉が降り注ぐどんどんと敵味方関係なくやられしていく

「紋章術つてこんな」とまで

「レオ姫のはケタが違う。倒されたくなれば」

「「とにかく逃げる」

「大爆破あああつ！！」

ドガアアアアアアアアンッ！！

「今の爆音　　そこに向かえば何かわかるかも　　」

場所は変わつて森をさまようカイトしかし、レオの紋章術『獅子王炎陣大爆破』の爆音を聞き、その方向へと歩き出していた

そのカイトの予想は当たり、人影を確認した

「あつ、あそこに入が　　！？」

悪寒を感じたカイトは咄嗟に右へと回避すると、巨大な鉄球がカイトがさつきまでいた地面にめり込んだ

「ほう。ネズミが『ソソソ』と動いてると思つたがなかなかやるようだな」

木の陰から現れたのは『ゴドワイン将軍』ぢりやらカイトがたどり着いたのはガレット獅子団の本陣だった

「えつと、いきなり危ないじゃないですか」

「『ソソソ』と裏から攻撃を仕掛けようとしていた貴様に言われとうないわ」

「いや、僕はそんなつもりはなくて、ただここがどこなのかを訪ねようと」

「ふん！そんな見え透いた嘘だれが騙されるか、バカめ。貴様も戦に参加する戦士なら堂々と戦え」

どうやら完全に誤解されてしまっているカイト  
確かに本陣の後ろから現れた者を疑うのは当然ではある

「ああ、行くぞ！！」

「くつ  
」

ゴドワインは鉄球を振り回し戦闘態勢に入る  
カイトも話し合いは難しいと判断し武器を構える

「ほう。隙のない良い構えだ。これはなかなか楽しめそうだ」

「僕は楽しめるとは思えないんだけどね」

「ガツハハハハツ！！改めて行くぞ！！」

カイト、異世界『フローニヤルド』での初戦闘が始まった

「ふん」

レオの紋章術『獅子王炎陣大爆破』にエリアはほぼ半壊  
回りは犬玉と猫玉が転がっている

「フランボワーズ！確認せい、勧者とタレ耳はぢやんと死んだか？」

『あー、はい！えーっとですね』

フランボワーズが確認する中、空から声が聞こえた

「そう簡単にやられるかあーー！」

「にしても高すぎない？ねえ、これ高すぎない？！」

そこにはシンクとエクレがいた  
エクレの機転で空へと回避したようだ

『だがこれでは、レオ閣下の的だぞ！』

フランボワーズの言つ通りレオは斧を構えシンクとエクレに狙いを  
定めている

だが、二人もそう簡単にやられる訳はなかつた

「貴様と手柄を分けたくないが、一人でからなけれどどうにもならん」

「えつ？」

「協力だ。さつきのタイミング、今度は外さん！」

「んつ！オーライ！」

「よし！行つて

』

エクレは空中で身体をひねらせ

「一九六一！」

「アーヴィング」と勇者を蹴り落とす

卷之三

待ち構えていたレオはシンクに斧を振るう  
シンクもすぐさま棒で勢いのまま叩きつける

衝撃波に弾かれるシンクだが、見事に着地。その間に工クレも着地。レオを挟む形となつた

一  
む  
二

二人は同時に走り出す

「なつ！」

レオは斧と盾でなんとか防ぐもあまりの威力により破壊されてしまつ

「はああああつ！…」

「つやあああつ！…」

さすがのレオも武器無しではなすすべなく、シンクとエクレの左右からの攻撃が一閃

「！？」

ピシッ！とレオの鎧がひび割れし破壊された

「あは むつ！？」

レオに攻撃が当たり笑顔を見せたシンクだがレオの鎧が破壊されたことにより、露出した姿を見て強張つてしまつ

「んむう チビとタレ耳相手と思つて少々侮つたか このまま続けてやつてもよいがそれではちと、両国民へのサービスが過ぎてしまつのお」

誰も認めるナイスボディにレオは見せつけるよつに言つ

「レオ閣下、それでは 」

「ひむ、ワシはここで降参じや」

レオがそう言つた瞬間、花火が上げられた  
回りにいる戦士たちも大騒ぎ

『まさか、まさかのレオ閣下敗北！…総大将撃破ボーナス350点

が加算されます！』

加算されたこと『レスコット』の戦士たちや『ルヒ』たちは大喜び  
「勇者よ。親衛隊長の助けがあつたとはいえ、ワシに一撃入れたことは褒めてやる！」

マイクを持ちながらシンクを褒めるレオ

「だが、今後も同じ活躍をできると思つなよ」

レオはシンクにマイクを渡し、そこから立ち去る

「あ、ありがとうございます！姫わ」

ピンヒレオの尻尾が立つ

「閣下」

「一、閣下……」

「つむぎ」

シンクが言い直すと満足げに笑うレオ

「閣下との戦い、怖がつたけど楽しかったです……！」

「ふつ

「？」

ひょいひょいと尻尾でマイクをエクレに渡すように指示するレオ  
よくわからない表情をしていたが、シンクはエクレにマイクを投げ  
渡す

その瞬間、レオの目が鋭く光る

「撮影班、タレ耳によれ。良い絵が撮れるぞ」

回りにいた撮影班はレオの言つ通りカメラをエクレへと向けた

「ベニコッ…」

「

」

エクレの服が盛大に破れた  
全員がそんなエクレに大注目

「あ あつ 」

なぜこうなったのか、エクレはあまりの事態に固まりながらも考えた

「はつ！？」

レオに一撃入れた場面がフラッシュバック  
シンクの棒が見事にレオの背中をとらえていたが長さまで計算でき  
ていなかつたようで、エクレの服に直撃していた

「ああああああああああああああああつ！？？」

『勇者、なんと自分騎士に誤爆！！防具破壊を越えて服まで破壊し  
てしましました！』

まわりの戦士たちがさらに大騒ぎ、いや大歓声

「あらあら 」

城にいる//ルヒもそんな光景に苦笑

「あははははは また来るぞ 」

『 ううで、レオ閣下。 堂々の『戦場』。 これは次の ん?』

フランボワーズが実況をしようとしたらありふれた

『 おおつとへ! なにやら戦場が騒がしいぞ? 両軍のポイントがぐんぐんと上がっている! ! ! 』

「えつ?」

「なに?」

フランボワーズの言葉にエクレに襲いかかれていたシンクと退場しようとしていたレオは得点板を見ると確かに両国の得点が凄い勢いで上がっていく

「フランボワーズ! これはどうしたことだ! 確認しろ! 」

『 ええと、少々お待ちを おおつとへ! これはへ?』

フランボワーズの驚きの声とともにモニターに映されたのは、ゴドウインとカイトの姿だった

「ぶるああああああつ……」

「ぐつ……」

「ゴドワインの斧がカイトを襲うが、すれすれで避ける

「はあつ……」

「おおつと」

カイトは素早い動きで攻撃しようとするが、ゴドワインは鎖鎌ならぬ鎖斧の先に付いた鉄球でカイトを寄せつけない

「これじゃあ近づけない

「はああああつ……」

鉄球に弾き飛ばされたカイトはどうあるか考えてみると、後ろからガレット獅子団の戦士が襲いかかる

「舞武……」

しかしカイトは冷静に撃退。戦士を切り倒す

「やはりやるな、貴様。」これほどの試合は久しぶりだ。つねおいらあああつ……」

「はあつーーー！」

「「「「『あやああああつーーー』」」

『ゴードウインの鉄球を避けるカイト。だが、その鉄球が回りにいた両軍の戦士たちが次々とやられていく』  
『うやら得点の増加はこの一人が原因のようだ

「『ゴードウイン? あやつ一体なにを』

『情報によりますとガレット獅子団本陣の裏から現れたあの赤い服を来たビスコッティの戦士を撃退しているもよつ』

「なんだと? なるほど、勇者を囮に我が本陣を狙う作戦だったのか

「

「違いますーーー！」

タオルを巻いて復活したエクレがレオの予測を否定する

「私たちはそんな卑劣な作戦を立てていません!」

『どうなのですか、ロラン殿』

実況席に座る解説のバナードがロランに訪ねる

「ええ、そんな作戦は我々は立てていません。それにあの赤い少年  
我々ビスコッティ騎士団にはいません」

「ほう。どうやらあやつは乱入者といつて訳か。面白い」

「レオ閣下?」

「タレ耳。マイクを」

「は、はー」

レオがマイクを受け取ると撮影班が注目する

『「ハドウインー聞こえるか?』

「ん?」

「「」れは闇下。 いかがなされた?」

レオの声に返事をする『ゴドウイーン

『 一体なにをしている。 そんな奴もつと倒さんか』

「「」あいにくですが、闇下。 このビスコッティ騎士、なかなかの腕前でしてな」

（闇下？ あの人ガ？）

モニターに映る闇下と呼ばれたレオを見て意外そうに見るカイト

『 もうかそ？ お前にそ」まで言わせる奴か』

「闇下」『 も、勇者にやられてしまつた』様子

『 ワシの「」とはい。 それとそやつはビスコッティの者ではないら  
し。 もうやら乱入者のようだ』

「ほつ 」

（あれ？ なんか嫌な予感がある ）

不適に笑うレオとゴドウイーンを見て悪寒を感じるカイト

『 齒の者、聞くがよい！ そこにいる赤い服の少年は乱入者だ！ そ  
の乱入者を倒した国には400ポイント 』

「えつ？」

『倒した者には特別ボーナスをくれてやるつー……』

「…………」

「えつ？」

大盛り上がりの戦士たちに未だに状況が理解できていないカイト

「なるほど、お前の言つ通りだつたようだな」

「わかつてくれたのでしたら、この戦いは止めこ

「残念ながら閣下がお前を『乱入者』といつ扱いをされてしまった  
時点でお前はこの戦の参加者となつた」

「え、ええつ！？僕が乱入者？」

「止めたこのなら……やられぬか、逃げるか、我々を全員倒すか  
だ。監の者、かれえい！！」

「…………」

「えええええええええええええええええつ……つ。」

「愈らえ！」

「うわっ！」

「特別ボーナスは俺のもんだ！」

111

死にやかれ！！

五  
五

『乱入者』扱いとされたカイトはビスコッティ・ガレット両軍の戦士から集中攻撃されている

一虎輪刃

「ぐああああああ！」？」「

しかし、カイトもやられる訳にはいかず、必死に反撃次々と戦士たちを倒していく

「やめり一般戦士では相手にならんよつだな。」  
「いやもう一戦といふか、少年！？」

「六」

ドガーンと鉄球をふるつ くぐる「ゴドワイン

「閣下がやられてしまつて我が軍は負けが決まつたとばかり思つたが、貴様のおかげで逆転のチャンスができた。感謝するぞ」

「残念だけどそつ簡単にやられるつもつはないよ」

「ふつ ぬおりや ああああつーーー。」

（「）人の攻撃は攻守一体。攻めながら自分の身を守る戦い方

「ならーーー。」

「何を閃いたかは知らんが」の「ゴドワイン」將軍に勝てると思つなーーー！」

鉄球を投げるゴドワイン

「

れつ あまでは避けていたカイトだが、双剣に力を込める

「むつーー蒼い炎？」

カイトの手から現れた蒼い炎に田がいく「ゴドワイン」  
蒼炎はそのままカイトの双剣を纏う

「三爪炎痕ーーー。」

カイトの得意技『三爪炎痕』を発動  
素早い動きで三つの斬撃を放つ強烈な技  
だがそれだけでは終わらず、三撃目を放つた瞬間、蒼い三爪の形を  
したエネルギーが放出された  
鉄球など粉々に破壊し、その放出されたエネルギーは真っ直ぐゴド  
ウインに

「これは紋章砲！？しまつ

「「「あやああああつ！？」」」

予想外な攻撃に反応が遅れたゴドウインは直撃  
2m近くあるゴドウインの身体が吹き飛ばされる  
その直線上にいた戦士たちも巻き込まれ吹き飛ばされてしまう

「今は

自分の放った攻撃がまさかここまで威力があるとは思わなかつた  
カイト  
それに、あれはそんなに力を入れてはいいない  
もし全力でやつたらどうなつてしまふのだろうか

「グフッ まさか、こんな切り札を持つていたとは油断した

「

「あつ、だ、大丈夫ですか？！」

むくつと上半身だけ起きるゴドウイン。着ていた鎧も三爪の痕がく  
つきり残つている

「ふん！ こんなことでくたばる俺様ではない。だが、身体が動かん。俺はここからで降参しよう」

『なんと、なんとあのゴドワイン将軍が乱入者に敗れた。なんといふ強さなんだ、あの乱入者は！？』

貴様、名をなんと言ひ？』

カイト

「ふつ、カイト。次、やつ合ひつて勝つのはじの『デウイン将軍だ。  
覚えておけ!」

やられたのに妙に嬉しそうなゴドワイン  
ライバル  
強敵が現れただことに喜びを感じているのかもしれない

「おいおい  
なんだ  
あのゴッドワイン將軍が勝つた奴にどう戦えばいい

「あの乱入者は何者なんだ？」

ざわざわと騒ぎ出す戦士たち。カイトの強さに怖じ気づいたのだろう  
これで無駄な戦いをしなくて済む、そう思つたのだが

「次は僕が相手だ！！」

声がした方を見るといつこはやる氣満々のシンクがいた

『あの「アドワイン将軍が敗れ、続いて挑戦するのは勇者シンクだ！』

「これは見逃せない対戦だ！！」

実況を聞いたカイトはがくくりと俯いた  
正直、これ以上戦うのは嫌なカイト

「あの勇者さん。僕

」

「こぞ尋常に勝負勝負！！」

逆にやる気満々なシンク

これは「ゴドワインと同じで話し合には難しいかもしねれない

シンクはこれも戦のイベントの一つであると考えているのだろう

「わかつたよ　　」「いつなつたらタイムアップまで逃げきるしかな  
い　　」

タイムアップまで残り何分あるかわからないが覚悟を決めるカイト

「こきますーーー！」

「来いー！」

ガキインとカイトとシンクの武器がぶつかり合つ  
二人の勇者の戦いが始まった

## EPISODE 4 『勇者対乱入者?』

「たつ…やつ…ほつ…」

「ふつ…すつ…はつ…」

「…すげー  
」」」

二人の攻防に思わず見とれてしまふ両軍の戦士たち

シンクの多彩な棒術でカイトを攻めるがカイトは上手く受け流す  
カイトは武器のリーチの差を埋める踏み込みの速さで攻めるがシン  
クの高い動体視力で防ぐ

「勇者殿も凄かつたがその勇者殿と互角に戦つあの少年は一体何者  
なんだ  
」

「兄様、私が確認に行つてきます」

ロランに持つてきてもらつた服を着替え終わったエクレ

「せうだな。せつかく勇者殿とお前が勝ち取ったポイントを無駄にするわけにはいかない。頼んだぞ、エクレ

「はい、行つてきまー。」

「せう、なかなかやうよのむ

「わうですね。おやか『ゾディワイン将軍が負けてしまつとは思こませんでしたー』

レオと一緒にモニターを見るこの女性は『ビオレ』  
さつさまで座況席でゲスト解説をしていた

「勇者とこ、あの少年とこ。実際に面白い。どれワシも直に見に行ひうかの」

「レオ様は降伏されているのですから決して戦に参加してはいけませんよ?」

れつれつと駆けドームに乗つたレオに忠告するビオレ

「わかつてある。それではゾーマ行くぞーはいよおつー」

『クワアツー』

「あわわわー？ 大変なことになつてしましましたね、リコッタ！」

「落ち着いて下さい、姫様。確かに乱入者なんて驚きましたですが昔は結構あつたみたいですし」

乱入者という突然の事態にあたふたするミルヒをビスコッティ王立研究員主席リコッタ・エルマールが落ち着かせる

「でもでも、あの人勇者様と互角に戦つてゐるのですよ？ それにあのゴドウイン将軍まで倒して」

「大丈夫でありますよ。今、ロラン様からエクレを勇者様の元へと向かわせたと連絡がきましたし、信じましょ」

「はい」

ミルヒは両手を抱きながらシンクの無事を願う

舞武！

「うわー！」

カイトの連續攻撃がシンクを弾き飛ばす  
これも経験の差なのかカイトがじわじわとシンクを追い詰めている

「凄く強い  
でも、楽しい…！」

ガバッと起きあがるシンクは棒を再び構えやる気満々

乱入者さん、僕今、とっても楽しいです！！」

それは良かっただけで、実況の人！聞こえますか？」

『はいはい！なんでしょうか？』

「この戦はいつ終わるのか知りたいんですけど？」

『えっと残り30分です。この乱入者はどうやらタイムアップを狙つてているようだ！！回りにいる戦士のみなさん。このままでは特別ボーナスがもらえませんよ？』

「そうだ、ボーナス！」

「乱入者を倒さないとあの乱入者がボーナスを独り占めになるぞ」「つかさ。今、戦つて疲れている勇者を倒した方がよくね？」

「　　」

「それだ！　」

「うえつ！？僕？！」

標的が乱入者から勇者へと変わってしまう

「半分は勇者で残りの半分は乱入者を攻撃するぞ！－」

「残念ながら全員という訳にはいかないようだ

「くつ　！」

いきなり遠くの方から飛んできた紋章砲にカイトとシンクは横に跳んだ

その直線上にいた戦士たちは残念ながら直撃しやられてしまつ

「ちつ、外したか

「ちょっとエクレ！今の僕にも当たるところだつたんだけど！――」

「当然だ。当てるつもりだったのだからな」

「酷い！？」

「 今の攻撃は 」

紋章砲を知らないカイトは少し唖然とする  
あんな技は『The World』にはないのだから仕方ない  
だが、そのおかげで一つの結論が出た

「 IJはThe Worldじゃない  
まつたく別の世界 」

そうではないかと思つてはいたが、いざそうだと分かるとショック  
が大きい

( 落ち込むのは後だ。今はこの事態を乗り切ろう。そうすればいろいろな情報が手に入る)

そつと決まれば、残り30分。やれることが三つ  
わざとやられるか、タイムアップまで逃げ切るか  
そして

ボオワツ！！

立ち向かう者を全員を倒す、それがカイトの出した答えだった

「蒼い炎？！」

「勇者、逃げるぞ！！」

カイトの蒼炎がさらりに燃え上がる  
シンクとHクレはすぐに逃げる

「三爪炎痕！！」

ドオオオオオオオオオオオオンツ！！！！

「これは 」

カイトの三爪炎痕の威力にシンクは啞然とする  
その威力は浮島を粉々にするほどの威力だった

「まるでレオ闇下と同じレベルの紋章砲だ

」

「 あれ？ 乱入者さん？」

カイトの様子がおかしい  
ふらふらと上体を揺らし始める

「 あ う ？」

「ええっ！？乱入者さん！？」

ドサッとカイトは倒れてしまった  
シンクは急いでカイトの元へと向かう

「 どうやらフローヤ力を使い過ぎたようだな まったく  
凄いのかバカなのか まるでどこかの誰かさんみたいだ」

「 そこで何で僕を睨みつけるのさ 」

「 ふんーととりあえずこの乱入者のポイントはどうなるのだ? 」

「 残念だが無効であろう 」

倒れるカイトではなくポイントを心配するエクレ  
そのことに於いては到着したレオが答える

「 ではこの乱入者はどうします? 」

「 そのものはワシに預からせてもらひおつ。こりこり聞きたいことが  
あるからね 」

「 わかりました。おい、勇者。我々は戦に戻るぞ 」

「 う、うんー 」

シンクとエクレは走つて戦場へと戻つた

それを見送つたレオは倒れるカイトに視線を向けた

「 それでお主はいつまで寝ているつもりか? 」

「 バレてましたか 」

むくじと倒れていたカイトが起きあがる

「ふつ、氣絶したフリをして事を済ませつとはなかなか頭が回るではないか」

「いや、実際に倒れたのは本当ですよ。技を繰り出した瞬間、立ち眩みがして」

「あれほどの力を使えば当然であろう。それでお主は一体どこの國の者なのだ？それほどの実力、よほどの名の通る騎士なのであります？」

「いや、僕は多分、この世界の人間ではないと思います」

「ほつ 詳しく聞かせてもらおう」

少し驚いた表情を見せたレオだったが、すぐに真剣な顔へと変わる

「レオではなんだ。場所を変えるとじよつ。お主は名はなんと？」

「はい、カイトと申します」

「そうか。カイト、乗るがよい」

レオはデーマを座らせ、カイトが乗りやすいつまむ

「うん。でもその前に」

カイトは上着を脱ぎ、その上着をレオに渡す

「その格好じや風邪引くよ。だからこれを」

「まつ すまぬな 」

「こ、こいつのへりこ当然ですか」

セツの言ひとカイトはレオの後ろに座る

「振り落とされぬよ、つかり掴まつておけ。行くぞ、ドーマー。」

『クワツワアーー。』

鳴き声と同時に風のよけに駆けるドーマ

そんな中、カイトは考えていた

（僕がどうしてこの世界に飛ばされたのか。わからないうことが、た  
くあるけど何か意味があるはず）

ふと戦場の方へと視線を向ける

（その意味を見つけ出してThe Worldに帰るんだ）

そう決意するカイトであった

カイトが異世界フローニャルドに飛ばされた意味とは  
それは誰にもわからない

## EPISODE 5『新たな勇者誕生！そして新たな戦』

「つまりお主は勇者がいた世界の『ねつとジマー』とやらの中に入れた者であると？」

レオに自分のことを話したカイト。だが、レオはよくわかつていな  
そもそもネットゲームのことすらわかつていな

「わかりやすく例えるなら童話の中に入った人物が飛び出きた、と  
いうことでしょうか？」

「あ、はい。それでいいと思います」

「なるほど。で、どうするのだ？」

「何がですか？」

「カイトは元にいた世界に帰りたいのだろう。しかし、先ほど言つ  
たが今のところ帰る方法はない」

「そう、帰る方法はない

だが、それを聞いてカイトは落ち込んだりはしなかった

「『今のところ』ですよね。なら可能性はまだ残ってる。残ってる  
なら僕は諦めません」

「ふふつ、ならばカイトよ。お主、我がガレット獅子団に入らぬか  
？」

「えつ？」

「探すと言つてもその間寝泊まりする場所が必要だろつ。それに帰る方法探しも我々ができる限り協力しよつ」

「それな願つたり叶つたりですが でも、良いんですか？」

「構わん。その変わりに我がガレット獅子団の勇者として働いてもらつからな」

「ゆ、勇者ですか 」

勇者といつ言葉に表情が引きつるカイト

「お主の実力なら誰でも納得だろつ。ビオレもそう思つだろ」

「はい、もひるんです」

あの戦を見ていれば誰でも納得してしまつかもしれない

「 わかりました。僕は勇者としてレオ闇下の下に使わせてもらひこま」

「うむ。では改めて名乗ろつ。ワシはガレット獅子団領国王レオンミシーリ・ガレット・デ・ロワ。勇者、お主の名は？」

「僕は異世界から着ました。名はカイト。『黄薙の騎士団長』または『蒼炎の騎士』」

カイトはThe Worldで他のプレイヤーから付けられた二つ

名を名乗る

「一つ名があった方が勇者っぽいと考えたのだ

「『』の一つ名に賭けて僕は勇者としてレオノミシヨリ闇下とガレット獅子団領国の民を守ることを誓つ……」

カイトは双剣を掲げてレオに違ひの言葉を述べた  
これはカイトなりの覚悟  
本物の勇者ではないけれどできることは全力でやる。それがカイトの覚悟

「はつはつはつ……『黄面の騎士団長』に『蒼炎の騎士』か。なるほど、ワシの『百獸王の騎士』と並び立つに相応しい一つ名ではないか」

カイトの覚悟と誓いが嬉しいのかレオは上機嫌である

「それに黄面の騎士団といつのも気になる。教えてもらひえるか」

「ええ、構いませんよ」

「お待ちください、レオ様」

カイトが話そつとしたらレオレが止める

「もうすぐ『ルヒオーレ様のコンサート』が始まりますが伺わなくてよろしいので？」

「だれが行くか。犬姫の歌など聞きとつないわ」

「 セウですか 」

「 そんなことよつビオレ、酒を持つてきてくれ。カイトの話をして呑むわ 」

「 わかりました 」

ビオレは酒を取りに行くため外に出ようが

「 あつ、僕も手伝いますよ 」

「 えつ？ でも 」

「 気にしないで下をこ。ほり行きまじょひ 」

「 え、あの、ちよつと ？」

カイトはビオレの背中を押しながら外に出た

「あの 勇者様 ？」

「 すみません。少し聞きたいことがあります。あと、僕のことはカイトと呼んでください 」

「 わかりました。でしたら私のことせビオレとお呼び下をこ。それでカイト様、聞きたいこととは？ 」

様付けも止めて欲しかつたが、それは今度言つことにしてカイトは本題にはいる

「レオ閣下とビスコッティの姫様のことなんですが  
なに仲が悪いんですか？」 何である

「 まずはもっと仲が良かつたのですよ。それもまるで姉妹のよ  
うに 」

「そんなレオ閣下がどうして姫様のロンサートを聞きに行きたくな  
いのでしょうか 」

「わかりません。レオ様が変わってしまったのは最近のことなので  
すが 」

「 もうですか。ありがとうございます、ビオレさん。それじゃあそ  
ろそろ行きましょう。レオ閣下が待ち伏せられてします 」

そう言うと人数分のコップと酒を持ったカイトは歩き出す

「カイト様」

そんなカイトにビオレが呼び止める

「はー?」

「どうしてそんなことを聞くのですか？」

「 せつかも、ロンサートの話をしたときレオ閣下の表情が曇っていました  
したから。気になつて それに僕は誓いましたから 」

「『レオ様と民を守る』ですか？それは戦だけの話では？」

ビオレの質問にカイトは首を傾げた

「僕は戦だけじゃなく、いろんなことで力になれる勇者になるんだ」

「それはレオ様だから。」

「違います。レオ閣下だけじゃなくガレット獅子団領国に戦士や民の監督、ビオレンさんみんなの勇者になる」

カイトは真っ直ぐな視線を夜空に向けながら答える

「やつですか」

カイトの答えにビオレンはこいつの笑顔でやつ笑つた

「やつと来たか待ちくたびれたぞ」

「申し訳ありません。少々、探すの忙しかつまじて」

適当な嘘をつきビオレンはレオに酒をつぐ

「それでは私はこれで」

「むう？一緒に飲まんのか？」

「少し用がありますので。お一人でごゆうくり。あつ、それと

「

頭を下げたビオレは入り口前で振り返る

「カイト様は素晴らしい勇者様になられると思いますよ」

ヤツリヒロオレは出て行った

「はははっ！ そうじやらんがじやる！ それではカイト、やつそくお主がいた世界について話してもううつ！」

「はー、喜んで」

カイトはレオの酒の肴に自分の話を語るのであった

その頃の勇者シンクは、元居た世界地球に帰れないことを知り、とりあえず家族や友達に連絡しようつとりコッタの力を借りて、無事成功

今はその帰りである

「姫様のコンサートに汗臭い姿で来られても困る。コンサート前に風呂を使ってこい」

「風呂ひとびー」で~」

「案内図もありますし、中の人間に聞けばわかるありますよ」

「ふうん わかった。そういうよ それにしてもあの乱入者とても強かつたなあ」

カイトとの戦闘を思い出すシンクは楽しそうな笑みを浮かべる

「まあ、貴様と同じアホだが実力は確かだな」

「空島を破壊してしまつまどの紋章砲を使っていたありますしね」

「あーー！思い出したらまた戦いたくなつてきましたよーー！でも、ここのまじや勝てない。だからレッツ猛特訓！」

「張り切るのは構わんが、まずは姫様のコンサートだ。貴様はとつとと風呂に入つてこい」

「了解。行つてきます」

やつぱりシンクはエクレ、リコッタと別れ風呂場に向かつただが

「つて 誰も居ないんだけど、みんなコンサートの準備で忙しいのかな？つていうか風呂場つてどこ？」

一人寂しく歩くシンク

ずっと探しているがシンクの言つ通り誰もいないため場所を聞くこともできないためさ迷つていた

「あつ、あそこかな？」

シンクが目に行つたのは明かりがついた大きな建物  
駆け足でそこに向かつて仲を確認してみる

「あつ！ロッカー！」

そこには脱衣所に置かれるようなロッカーを発見する

「イエスッ！大正解！」

シンクはすぐに服を脱いで風呂場へと直行した  
だが、シンクは気づかなかつた。貼られてあつた貼り紙に

「うわあ、スッゴいやー！露天だあ！」

星空輝く露天風呂に感動するシンク  
しかも、かなりの広さで大浴場である  
感動していると、バシャーンと水の音が聞こえる

「あれ？先客さんかな？」

シンクは湯気でよく見えずその音がした方向に向かうが  
「つーー？」

「あー、勇者様？」

ピンク色の犬耳と尻尾。そして聞き覚えのある声  
それは間違いなくミルヒであつた

「　　」「　　」

しばらく続く沈黙

シンクの持つていた桶が落ちた瞬間、一人は正気に戻つた

「はーーきやあああーー？」

「あああああーー？見てませんーなにも見てませんーー？」

顔を真っ赤にして叫ぶ二人

シンクは本当に見ていないのか気になるところでもある

「す、すみません。勇者様の前でこんなはしたない」

「ああっ、いやっ、あの僕、人がいるとか、まさかあの、その姫様がいるとは思わなくてすみませんすみません」と

ザボーンンと落ちた桶を踏み態勢を崩し風呂へと落ちる

「「めんなさい。私、普段こちらの大浴場にはなかなか入れないものですからこんな時くらには、つて」

とにかくミルヒはタオルを巻いてくれと心から思つシンクはお湯の中くと潜ってしまう

中学生にはこの刺激はまだ少々

「あ、あの私、もう上がりますので、勇者様はビリビリゆっくり

タツタツと走り去るミルヒ

「ふはあっ！」

息切れで湯から出るシンク

回りを見渡すとあるのはタオルのみ  
まずいことをしたなど類をかくシンク

「あの、勇者様？」

「は、はいー？」

声が裏返しながら返事をしたシンクは振り返るとセイジはちやんとタオルを巻いたミルヒがいた

「只今のじとか、これからじとか、勇者様にお話したいこ

といつぱいあるんです。ですから「ンサートが終わったら少しお時  
間いただけますか?」

「あ、あつ、はいーそれはもちろん!」

「ありがとうございます。ではまた後ほど」

「はい はあ」

ミルヒは笑顔で出て行ったのを見てシンクはホッと一息した  
そこでシンクはることに気づいた

「姫様に聞けば良かつた まさかここ、女湯じや」

」

残念ながらこの大浴場は時間交代制であり、今の時間は女性の時間  
だつた

その貼り紙が貼つてあつたのだが、残念なことにシンクはこの世界  
の字は読めなかつた

だが、その紙に『ミルヒオーレが使わせてもらつています』と可愛  
いイラスト付きの紙も貼つてあつた。それに気づいていればこの事  
態は回避できたかもしれない

「ないよね」

」

ふうと大浴場の湯を堪能していると

「ああああああああああ！」

ガシャーンと何かが割れる音と一緒にミルヒの叫び声が響き渡った

# 「姫様！」

急いでシンクは風呂から上がり着替えて外に出るのだった

「まつ！カイトはいろいろな冒険をしてきたのだな」

「うん。それにたくさんの方達や仲間も出来たんだ」

カイトの話に盛り上がる一人

「カイトの話は面白いの。酒が進む」

「それは良かった」

いつの間にかカイトはレオに対して敬語ではなくなっていた  
ずいぶんとこの短時間で仲良くなつたものである

「それでね。ミアがぴろしに」

「レオ様、失礼します」

カイトが話を続けようとしたがビオレが少し慌てた様子で入ってきた

「なんじゃ？せっかく良いところじゃつたのに」

「緊急事態です。ガウル様が」

「なに」

「？」

険しい表情をするレオ。カイトはよくわからないといった顔である

「今、放送されている映像を『覗ください』」

レオとカイトはビオレの言われた通り映像を見る

「むうーむうー！」

建物の上にいたのは縛られているミルヒ  
そして

「我らガレット獅子団領」

「ガウル様直属秘密諜報部隊」

「「「ジエノワーズーー！」」」

ライトアップに爆発と過激に名乗る三人

「姫様ーー！」

そして三人を睨みつけるシンク

「ビスコッティの勇者殿、あなたの大事な姫様は我々が攫わせてい

ただきます

この映像はあちこちに放送されており、見ている民たちは大盛り上がり

「'つけらま!!'オン砦で待ってるからなあ！」

「姫様がコンサートで歌われる時間まであと一刻半。無事助けに来られますか？」

それを見ていたエクレやリ「シタも呆然としている

「つまり大陸協定に基づいて『要人誘拐奪還戦』を開催させていただきたく思います」

そう言つと映像がミオン砦へと変わる

「'つけらの兵力は二百。ガウル様直下の精銳部隊」

「で、ガウル様は勇者様の一騎打ちを」所望です

「勇者さんが断つたら姫様がどうなるか」

「むうーむうー！」

俯くシンクは答える

「受けて立つに決まってる!!僕は姫様に喚んでもらつた。ビスコツティの勇者シンクだ!どこの誰とだつて戦つてやるーー!」

シンクは勇者に相応しき面葉で戦の申し出を取けたのであった

「あらあら 勇者様受けてしまわれましたね 」

「あのバカ共が…！ 一体、何を考えておる…！ 勇者も戦の申し出を受けあつて」

「えつへ~どつこ~」と、あれは受けたれぬおえなこと思つたがど

「カイト様は知らないのでしたね。宣戦布告の仕組みを」

「仕組み？」

「はー。宣戦布告を受けたところは公式的の戦と認めたことにならぬのです」

「ところでは勇者さんを受けていなければ」

「犬姫は無事に解放され、『ンサー』トも行つ」とが出来たものをあのくつぽこ勇者が安易に請け負つた

ちなみにそのくつぽこ勇者は

「この、ドアホうがー！」

「どうああああああああつーーー? ? ?」

エクレに飛び蹴りを喰らつていたりした

「まあ、知らなかつたとは言え勇者さんの気持ちはわかるよ」

「なに？」

「悪者に攫われた姫を助けるのが勇者の運命。  
さんは本当に良い勇者みたい」

「ふん。どうでもよい。さつさとあのガキ共を止めに行く。ビオレ、  
鎧を」

「はい、かし」まつました

ビオレはレオの鎧を準備するため出て行つた

「まつたく  
」

「あのや、レオ閣下」

ため息をつくレオにカイトが話しかける

「なんじや？」

「その止めに行く僕も参加していいかな？ガレット獅子団領の勇者として、ね」

ノルマニセイ

そこには、田の兵がシンケ達を待ち構えていた。

その中にはゴッドワイン将軍と銀髪の少年がいた

「いやあ、ガウル殿下に指名いただき、この『ドライ』。光榮でありますぞ」

この少年は、ガウル・ガレット・デ・ロワ。レオの弟である

「いやあ、まつたく。砲攻めも悪くはありませんがやはり自分はやはり、野戦が得意でありますゆえ」

「おー、がつつい暴れてくれや。まあ、お前も飲め、食えー。」

「はっ。では遠慮なく。おっ、そういえばミルヒオーレ姫は今は「ルージュに任せてあるよ。接待態勢は万全さ」

「なるべく」

「後はまあ、俺のほうでもちよこと連つとこりうがあつてなあ」「

？」

ガブリと肉にかぶりつくガウル

「それよりもお前のその鎧。どうした?」

「これでありますか?」  
「いっは前回の戦に現れた乱入者により付けられ傷あります」

ゴドウインの話にガウルの耳と尻尾が立つ

「乱入者?珍しい それにお前にそれほどのダメージを『えら  
れる実力者か そいつにも会つてみてえな。その乱入者はどう  
した?」

「はつ。レオノミシヨリ閣下と共にいます」

「姉上と?それなら後で会えつか

その乱入者とは早い形で出来つゝことになるのだがまだガウルは知ら  
ない

その頃外では

「本隊を待ちたいが待つてはいる時間はどこにもない」

卷之二

セルクルに乗つてミオン砦に向かうシンクとエクレ

「ガウル殿下の兵は悔しいが精銳だ。野戦での数を相手にするのはぶつちゃけ厳しい」

- うん！

「だが、かつての大戦では、千を越える騎兵隊を切り抜け、見事に一騎掛けで敵将までたどり着いた伝説の騎士だつて存在した」

「マジでー。」

エケレの話に驚くシンケ

普通ならありえないが確かにその語は存在する

「やひやれな二りとせなにー。」

同時に武器を構えるシンクとエクレ

「やあねば時間に間に合わん。」

「最短距離を最高速で！！」

# 「正面衝突！！」

二人は真っ直ぐミオン砦へと向かう  
それを見たガウルの精銳部隊は動搖

「よーし!返り討ちじやボケエ!...」  
兵、つまえ!...」

ପାତା ୧୦୦

精銳部隊は弓を放とうとするが

何かが放たれた音が響く  
見るとピンク色の塊が降ってきた

ヒュ~~~~~ドガーン!!

「 「 「ギヤアアアアアアアツ!...」」

そのピンク色の塊に精銳部隊が吹き飛ばされる

「ほ、砲撃！砲撃いいい！？」

「まさか、砲兵がいるのか！？」

そう、これは砲弾

その砲弾を撃ち放たれているのは近くにある林の中

「いりでありますよ～～！～ビスコッティ学術研究員主席リコッタ・  
エルマーレ～～！」

そういうと置いた砲台からピンク色の砲弾が込められる

「戦場では砲術士をやらせていただいているあります」

指を鳴らすと砲弾が撃ち放たれる

「ああああああああ」  
「ああああああああ」

そんなリコッタの援護もあってシンクとエクレはミオン艦へと駆け抜けて行く

「ですが、お館様。ビスコッティとガレットの戦のようですから我々も加勢をするべきでは」

「若者同士、楽しく戦をしているの」「それらへ。大人が邪魔をするのも無粋でござるよ。拙者はのんびり見物をさせてもらうでござる」

そう言って酒を飲む女性

この一人は一体何者だろうか

場所は変わってココナ広場

そこにはガレット獅子団の本拠地

弟のガウルの戦に怒り心頭のレオは防具を付けている

「ガウルの奴、勝手に誘拐などしあつてからに」

「ルージュがちゃんと側にいたはずなんですが  
いたのようですね。申し訳ないです」

「国家と領主の経力をガキの遊びで乱されてたまるか！？」

「そういえばカイト様のお姿がお見えにならないのですが

？」

殿下のお

「カイトなら先に向かつた。ガレットの勇者としてな」

怒りの表情をしていたレオだが、そのときは少し笑顔を見せていた

「えつ？でも

」

「なんじや？場所なら教えたぞ」

「いえ、カイト様は何でミオン砦へ向かつたのでしょうか？」

「むつ？セルクルで向かつたのじやろ？」

「先ほど確認しましたがセルクルを使った形跡はありません

」

「なんじやと？では、カイトはどうにへ？」

その頃のカイトはこうと

「うーんともう少しかな

走っていた

バカみたいな話だが事実であり、ものすごい速さで駆けていく

「あつ、見えてきた！」

カイトの田の先にはミオン砦が見えた

「ん？ なんで花火が上がっているんだろ？」

パンパンと鳴り響くのは花火の音

戦が終わったのかとも思ったが、金属音と人の叫び声が聞こえてきたため終わってないことがわかりスピードを上げる

「正門は開いてないか」

破ろうと思えば破れるが勇者としてその参上はいかがなものかと考  
える

「だつたら飛び越える！」

カイトは足に力を込めてジャンプ。正門を飛び越えた

「これは」

カイトが見た光景は一百もいたはずの精銳部隊が全滅  
そして広場の真ん中には背の高い女性とゴドウインがいた

「むつ？ お主は？」

「貴様はカイト…？」

「『J』の戦を終わらせに来ました」

「なに?」

カイトの言葉に、ゴード・ウェインは目を細め睨みつける  
カイトは気にせず双剣を抜いて宣言した

「僕はレオ闇下の命により、ガレット獅子団領の勇者となつました  
!勇者カイトです!!よろしくお願ひします!!」

「貴様が我が国の勇者だと!!?」

「はい!説明は今、向かってくるであらう!レオ闇下に聞いて下せ。」  
それより僕はレオ闇下に命じられた任務をしないといけないんで

「まつ?その任務とは何で?」

「それは

カイトが話そうとした次の瞬間

ガキイン!

いきなりカイトの背後から現れた女性が短剣で斬りつける  
だが、カイトは双剣でそれを受け流す

「今のは危なかつたよ。凄い速さだつたよ」

「それを受け流したお主が言つても説得力がないでありますよ」

「君は?」

「拙者はビスコッティ騎士団隠密部隊筆頭ユキカゼ・パネトーネに  
ござる。背後から不意打ち申し訳ないでござる」

「構いませんよ。でも出来れば通らせて欲しいです」

「それは無理な相談でござる」

「そうだよね。でも通らせてもらひつよ」

カイトは城に向かつて走り出す

それを黙つて通す訳もなくユキカゼが先回りする

「紋章拳!」

ユキカゼの身体から黄色いフロニーヤ力を纏う  
そして田にも止まらぬ踏み込みで接近する

「ユキカゼ流体術！」

「喰らわないよー。」

カイトも負けじと自慢の踏み込みの速さを見せ、ユキカゼを抜き去る  
そのまま城に向かうが

「わせぬで！」やるよ、ガレットの勇者殿

「くつ あなたは？」

「ビスコッティ騎士団自由騎士隠密部隊統領ブリオッシュ・ダルキ  
アン。よろしくで！」やる

「ブリオッシュさんですか。あなたも邪魔しますか

「まあ、やうなるで！」やるよ。あと、先ほどおっしゃつておったレ  
オ姫に命じられた任務とは何かを聞きたいで！」やるしな

「簡単な話ですよ。この戦を起こしたガウル殿下とジエノワーズの  
みんなを懲らしめて！」つて

「なるほどなるほど。でもまあ

ブリオッシュは刀剣をカイトに向ける

「拙者は若者たちの殿を務めているでござるゆえ。通すわけには

」

「ぬおりやあああああああつ……」

ブリオッシュュが話している途中、ゴドワインが鉄球を一人の間に投げつけた

「ゴドワイン将軍！」

「行け、カイト。閣下の御命令なのだろう。ここは任せろ」

「すみません、ありがとうございます……」

カイトはゴドワインに礼を言い、城に向かつ。それを追おつとゴキカゼが行動しようとするが

「よい、ゴキカゼ。行かせてあげるでござる」

「良いのですか、お館様？」

「つむ。追つてもゴキカゼでは少々相手が悪いでござるが」

「うつ、確かに」

「ダルキアン卿、ゴッキー！ 敵、増援であります……」

「数は？」

双眼鏡で遠くを見ているリコッタが一人に向かつて報告する

「それが  
レオ閣下一騎掛けでありますーー！」

戦を治める戦乙女がもうすぐ到着する

## EPISODE 7 『協力戦!!』

ブリオッシュ、ユキカゼの力を借りてガウルの元へとたどり着いたシンクは、そのガウルと戦闘を開始していた

「良いねえ 十分客を呼べる腕前だ」

二人の力はまさに互角。だがまだガウルに余裕があつた

「だが、もうちょっと派手な技が欲しいとこだな。俺らの戦は見せてなんぼの代物だ」

そういうとガウルから紋章が現れる

「強さと華麗さ、豪快さ。その辺が騎士と戦士の必須事項! そのための力がこの気力だ!!」

紋章術とはまた違う気力を使つた術  
ガウルの両手両足に気力で創られた鋭い爪が現れる

「氣力解放! 『獅子王爪牙』!!」

ガウルが飛び上がりシンクを襲う

「くつ!!」

「どうおりやああああああああつ!!」

シンクはガウルの猛攻を紙一重で防ぐもシンクの棒に対しガウルは

両爪。手数はガウルの方が上であるためシンクは防戦一方

「天雷」

ガウルは気弾をシンクに放ち上空へと浮かす  
ガウルの追撃にシンクは籠手で防ぐも破壊されてしまう  
まだ、ガウルの攻撃は終わらない  
紋章を利用しその勢いでガウルはシンクへと襲いかかる

「爆碎陣！」

ガウルの蹴りがシンクに決まりそのまま地面へと叩きつける  
だが

「あれ？」

そのまま勢いあまってシンクを引きずりながら壁へと激突した

「ぐうお、があつ　　ー？」

顔面にぶつかったのか顔を押されて痛がるガウル  
でもすぐに立ち上がり笑い出す

「どうよー！『獅子王爪牙』からの『天雷爆碎陣』！－街じや噂の氣  
力系必殺技だ。ふつ、終わつたな」

格好つけているが鼻血が出ているせいで決まっていない。そして戦  
闘も決まってはいなかつた

「勝手に終わらすな！－！」

ドガーンと瓦礫に埋まっていたシンクが元気良く登場

「あ、あれ？いや、今のは普通に終わりだろ？！」

そんなシンクにガウルは驚愕の表情をしている

「何で立つてんだ、てめえ。化け物か？化け物なのか！？」  
ん

シンクの身体をじろじろと観察するガウル

そしてあることに気づいた。それはシンクの武器の先端がボコボコ  
にへこんでいた

そう、シンクはあの攻撃の最中、武器を使って防御・受け身をして  
いたのだ

(こいつ、あの一瞬でそんな防御を)

シンクの動きに感心するガウルなのだが

ブシュツ！

「やつぱり効いてた！？」

頭から血が噴出するシンクさすがに全ての衝撃を受け流すことは出来なかつたようだ

卷之三

「ああ、バカ！お前！」

痛みに駆け回るシンクに、それを追いかけるガウル  
この二人真面目なのかそうじゃないのかわからない

場所は変わつて、城の外

エクレは今、ミルヒを誘拐したジェノワーズの三人と戦っていた  
さすがのエクレでも三人相手では苦戦を強いられている

（ガウル殿下の副使ジェノワーズ。基本的には三人ともバカで間違  
いないが 戦いとなればやはり強い ）

「ほらほら、休んでないでどんどん行くで！！」

大斧を持ったトラ耳少女が大斧を振り落とす

「ちつ

「 次は私 」

短剣を持った黒猫耳の少女はエクレに無数の短剣を投げつける  
なんとか避けるもそれは誘導だった

「私を忘れないでくださいね」

弓矢を持ったウサ耳をした少女はエクレに弓を放つ

「ぐつ！？しまった！目隠しか！？」

弓はエクレではなく、エクレの足元に着弾

フロニヤ力を纏つた弓のため爆発が起こり、砂煙が起こる  
そのためエクレの視界が砂煙によつて奪われてしまったのだ

「もらつた！！」

トラ耳少女がエクレの背後から現れ大斧を振り落とす  
咄嗟のためエクレは防御も回避もできない

(ここまでか )

エクレがそう思った  
その時だつた

ガキイン!!

「なつー!?

「えつ

!?

「ふえつ！？」

鳴り響く金属音。トラ耳少女の斧が防がれていたが、それはエクレが防いだのではなかつた

「大丈夫かい？」

「えつ、お前は……」

「あんた、何者や！？」

トラ耳少女が斧を構えて警戒している

「僕はカイト。レオ閣下から……」

「貴様は乱入者！－何で貴様がここにいる！－」

カイトが話している途中、エクレに邪魔されてしまう

「今、説明しようとしたんだけど　まあ、いいや。えつと、君たちがジエノワーズかな？」

「そいや！－ウチ達がガウル様直属親衛隊ジエノワーズが一人。ジョーヌ・クラフティ！」

「同じくジエノワーズが一人。ノワール・ヴィノカカオ

「

「同じくベール・ファーブルトン！」

ドガーンと決めポーズをする三人

「あれ？秘密諜報部隊じゃなかつた？」

「それがあいつらの本当の部隊名だ。というか、本当に何をしに来たんだ、お前は」

そんな三人を無視するカイトとエクレ

「ゴラ！無視すんな！！」

「『めん』めん。えっとね、タレ耳さん」

「親衛隊長エクレール・マルティノッジだ！タレ耳と呼ぶな！」

「すみません、エクレールさん。僕はここに来た理由だけど、終わらせに来たんだ」

「何を？」

エクレの質問にカイトは笑顔で答えた

「この戦を！」

「む」

「でも、レオ閣下にジェノワーズとガウル殿下を懲らしめろって言われてるからあの三人を倒す」

双剣を構え直しジョノワーズの二人を見るカイトだが、エクレはそれを許さなかつた

「ちょっと待て！あの二バカは私が倒す！手出し無用だ！」

「うーん それじゃ一緒に戦う？」

「なに？」

「1対3んじゃ分が悪い。僕も協力するから一緒に戦おう」

「断る」

即答するエクレに少しずつこけるカイト

「ど、どうして？」

「貴様などの助けなどいらん」

「でも、姫様を早く助けたいんでしょ？」

「うう

「だったら手段を選んでいる場合じゃないでしょ？」

「それはそうだが

「

まだプライドが許せないのか協力を躊躇うエクレ

「それ出來なかつたら僕がレオ閣下に怒られひやうからだ。エク

レールさんに協力して欲しいんだ。お願ひ」

「まあ、まあ、そこまで言うのなら協力してやる。感謝しろよ」

「うん。 ありがとう、エクレールさん」

そう言うと一人はジエノワーズを倒すため協力することになった

「なんやよくわからんけどやるんならやつてやるでーー」

「負けない」

「お相手いたしますわ」

ジエノワーズたちも一人を見て戦闘態勢に入った

「足を引っ張るなよ、乱入者」

「はははっ、うんー、気を付けるよ」

カイトとエクレの協力戦線が始まった

## EPISODE 8『決着…』

「はつ…」

「わあつ…？」

「うつやあ！」

「ひやあつ…？」

カイト・エクレ対ジエノワーズの戦闘が始まつて数分  
戦況は一気に変わつていた

「ただ一人増えただけやのにこんなに攻め込まれるやなんて…？」

（確かにまさかこんな簡単にあの三バカをここまで追い込むことが  
できるなんて　　それも全部　　）

エクレはチラツと視線を動かす。そこにいたのは

「はあつ…」

「うつ  
」

ノワールを双剣で弾き飛ばすカイトだった

（この男。邪魔をするどこのか私のやりたいこと、やつて欲しいこ  
とを理解して動いている。本当に何者なんだ　　）

エクレがそう思つ中、決着は着いた

「疾風双刃！！」

「いやああああつー？」

カイトの三連撃がベールに襲いかかり無惨に宙を舞つ

「あうひつ 降参です」

「ベール！？」

「油断大敵だぞ」

「しもつ わああああつー？」

やられたベールに気をとられたジョーヌの隙を狙い見事に一撃を喰らわした

「！」、降参や～ 」

「さて、残つたのは君だけだけど 」

「 」

残つたのはノワール・ヴィノカカオ。ただ一人

「 降参します 」

どこから取り出したのか白旗を取り出してノワールは降参を口にした

「やりましたね、エクレールさん」

「ああ  
」

勝てたのは嬉しいがどうも納得がいかないエクレ

「それじゃあ次はガウル殿下と勲者さんのところへ向かおう」

「ちょっと待て。お前、レオ閣下からここにいらを懲らしめられて言  
われたんだろ？」この程度で良いのか？」

エクレの言葉に余計なことを言つた、と言いたそうなジエノワーズ  
「うーん まあ、それも一理あるけどジヨーヌさんやベルルさ  
んには十分に懲らしめたし」

「それではノワールにもやれ。あいつらには我々ビスコッティにも  
迷惑をかけられたのだから。当然の報いだ」

「うーん、他国のみんなに迷惑をかけたのはいけない」とだし  
わかつたよ」

「つー？」

カイトが自分のところに向かってくるのを見てノワールは怯える

「か、カイトさん。できれば穩便に

「

「せ、せや。ついでに悪氣があつてやつた訳やあらへんから

怯えるジエノワーズは笑顔で向かってくるカイトを見てさらに怯える。この状況で笑顔は逆効果らしく、背後に黒いオーラが見えているらしい

「 」

カイトはノワールの前に立つて手を伸ばす

「 つ 」

ノワールは衝撃に耐えるため田を瞑る

コジン

「 えつ ？」

「 もう！」んな」としちゃダメだよ

何が起きたのかわからないノワール  
ぽんと肩を叩かれるくらいの衝撃とカイトの小さな子供にかけるよ  
うな優しい言葉

「わかった？」

「は、はい 」

「ジョーヌさんとベールさんもわかった？」

「は、はい！」

唚然としていたジョーヌとベールは驚きながらも返事をする

「うん それじゃあ、ガウル殿下と勇者さんはどうしているのか教えてもらえるかな？」

「はい あちらです 」

「あつちだね？ありがとう、ノワール 」

「い、いえ

「

カイトのお礼にノワールは頬を赤らめて俯いてしまつ

「お、おい。それは仕置きとこいつのか？」

カイトがノワールに教えてもらった方向へと向かおつとしたらエクレに止められる

「いいんだ。三人ともちゃんと反省してるみたいだし、それに

」

「それに？」

「後からやつてくるレオ闇トコ仕置きやねると思つからせんぞ

」

「ああ なるほど

」

「それじゃあ僕は行くよ。あの一人を止めないと」

そう言ってカイトはシンクとガウルの元へと向かつた

「何者なんや、あのカイトつて男。めちやくちや強いやん」

カイトが立ち去り、身体に力が抜けるジヨーヌ

「うん でも、とても優しい人」

「わつですね。私を倒したときも手加減して下わつましたし」

「また 会えるかな ？」

「じゅやうな？なんやノワール。あいつのこと気にいつたんか？」

「わからない でも 頭を撫でられて心がぽかぽかした  
またして欲しい」

カイトに撫でられたときに手を置きながらわつわつノワール

「まあ、レオ閣下の関係者みたいやからまた会えるとは思ひナビ」

「エクレちゃんは何か知つているみたいですね。何者なんですか？」

「私も今日の戦で初めて会つたから詳しく述べ知らん。それより後ろ  
を見た方がいいぞ」

「「「えつ？」」」

エクレに言われて後ろを向くジヨーヌ

アーティザン、レトロピュアがいた

「お主が、覚悟はできてるな?」

ジエノワーズの叫び声の後に三つの鈍い音が聞こえるのであつた

ガキン！

「くっ…」

「ぐっ…」

その頃のシンクとガウルは激しい戦いを続けていた

「てか、この後コンサートってマジか？マジなのか？」

「だから、そう言つてんじやないか！」

「あんの、ジエノワーズのアホ共が。また適当な仕事をしやがった  
な」

どうやらガウルにはコンサートがあつたことはジエノワーズから知  
らされていなかつたようだ  
さすがのガウルもそれを知つていれば戦を始めようとはしなかつた  
であろう

「くそがつ！こうなりや自棄だ！勇者をぶつ倒して終わらせてやる  
！」

「僕は姫様のために負けらんない…！」

お互に距離をとり、輝力を解放させる

「これで

「

「決着を　　」

「　着ける！　！」

二人は同時に走り出す  
そして二人の武器が

「そこまでーー！」

ガキイン！！

「「なつー?」

ぶつかる直前、誰かが割り込み一人の武器を受け止める

「ガウル殿下に勇者さん。そこまでだ」

「あなたは

「な、なんだてめえは!」

「あなたがガウル殿下ですね?僕はカイト。レオ閣下の命であなたを止めるように」と

「あ、姉上が

レオの名前が出た瞬間、青ざめるガウル

「もうすぐレオ閣下がこちらに来ます。ですから

「悪いがもう止められねえ。俺は勇者と決着を着ける。邪魔すんな  
らてめえをぶつ倒す!ー!」

紋章を発動させるガウル  
もう後には退けないようだ

「 やるしかないか、勇者さん」

「 は、はい！」

「ガウル殿」下との決着はまた今度と言つ」と構いませんか?」

「 は、はあ 」

「 それじゃあ……」

ボワア！！

カイトは蒼炎を身体に纏う

「蒼炎 まさかてめえが 」

ガウルは『ゴドワイン』から話を聞いていた

（確かに蒼炎を操る赤い服の少年にやられたって ）

ガウルは、にやりと笑う

「そりゃ、てめえが『ゴドワイン』を倒した奴か。ちよつといい、俺は  
てめえとも戦いてえなと思つてたんだ！！！」

武器を投げ捨て、輝力を解放させる

「『獅子王爪牙』……」

「それは光榮の極み！『蒼炎舞』……」

カイトの蒼炎がさらに燃え上がる

「うおおおおおおおつ……！」

「はああああああつ……」

「なつ……？」

ガウルの猛攻を捌ききり、懐へと潜り込む

「『旋風滅双刃』……」

「「」わあつー？」

カイトの六連撃にガウルは弾き飛ばされる

「ぐつ やるじやねえか 」

「さすがガウル殿下。あの連撃の半分を防ぐなんて」

ガウルはゆつくりとだが立ち上がる

カイトの言つ通り、六連撃の旋風滅双刃を防いでいた  
自信が微塵もねえよ」

「今のは本氣に近い強さでやりましたからね」

「まだ本氣じゃねえってか?上等じゃねえか。おい、勇者ーー一人で  
やるぞ!」

「えつ?」

「うん!僕もこの人とまた戦つてみたかったんだ!!」

「ええつー?」

戦いを鎮静に来たのに逆に盛り上げてしまつ形になつてしまつ

「ガウル殿下はともかく勇者さんは姫様を 」

「行くぞ、勇者ー!」

「うん！！」

まったく聞く耳を持たない。この世界は人の話を聞かない人が多い  
気がする

「仕方ない

カイトは双剣を構え直し一人と戦おうとするが

ド「オーンッ！！

「「「うえつーー？」」

いきなり壁が吹き飛んだ  
いきなりのことに驚愕するシンクとガウル  
その壁があつた方を見てみると

「ガウル　　！それにビスコッティのへつぽこ勇者！－！」

「あ、姉上！－？」

「へ、へつぽこ？－」

レオの登場に一人はさらに驚愕  
怒るレオは息を思いつきり吸い大声を出して言つた

「ガキ共おおおおお！－！戦場でなにを遊んでおるかあ！－！」

「「『』、『めんなさい』…？？」

レオの迫力にシンクとガウルは早く綺麗に頭を下げて謝った

「まったく ジエノワーズを止めておつたからこっちも大丈夫  
かと思つておつたのじゃが カイトはどうした？」

きょりきょりと回りを確認するが、居たはずのカイトがない

「姉上 あれ 」

「むつ？」

ガウルが指さす方を見てみると

そこには瓦礫から飛び出でいるカイトの手があつた

「カイトー、誰にやられたのだー？」

（（（あんただよ）））

シンク、ガウル、「ロードワインの思考が重なった

そう、カイトが埋まっているのはレオが吹き飛ばした壁が原因であつたりする

ちなみにカイトは瓦礫の山たつじんが悪く氣絶していた

## EPISODE 9 『腕輪』（前書き）

久しぶりの投稿です

## EPISODE 9 『腕輪』

姫様奪還戦が強制終了させたレオと主犯達がトミルヒがいる部屋へと向かっていた

「レオ様、申し訳ございません。こんな事とはつゆ知りず

」

「よい。悪いのはそこのバカ二匹だ」

「」

頭にたんこぶをできているシンクとガウル  
ビツや、ビツや、レオにたつぱり絞られたようだ

ちなみにカイトは

「二人とも大丈夫?」

「なんであんたはそんなにピンピンしてんだよ

」

怪我一つなく、落ち込む一人を励ましていた

「邪魔するぞ」

「あつー? レオ様! ー!」

入った部屋には攫われたミルヒがそこにいた

「あの ー! 無沙汰

」

「すまなんだな、ミルヒオーレ姫殿下。戦勝国の宴の邪魔など無粋の極み。お主の都合無視して連れ出した不祥の弟の非礼を詫びよう」

「いえ！あの、ガウル殿下はご存知なくて　　」

「今回のことは何か別の形で詫びを考える。今は早く戻るとよからう」

「レオ様　　」

「　　」

レオのミルヒに対する素つ氣ない態度にカイトはただ黙つて見ていた

「ルージュ、後は頼んだ」

「あ、はい」

「カイト、お主も来い」

「あ、うん　　おつと　　」

レオに呼ばれついて行こうとするが何かを思い出し振り向くカイト

「ミルヒオーレ姫殿下、でしたよね？」

「は、はい！」

いきなり呼ばれてびっくりしたのか耳と尻尾を立てながら返事をす

ルルルヒ

「申し遅れました。僕の名前はカイト。レオ閣下の領地、ガレット獅子団領地の勇者をしております。これからよろしくお願ひします！」

「は、はい。」ルルルヒ

「それでは失礼します」

礼儀正しく挨拶を終えたカイトは早足でレオを追いかけた

その数秒後に起きた驚嘆の声に氣づかず

「まったく  
お主という奴は  
んのじや  
」

「『めん。走つて行つた方が早いかと思つて

何故、セルクルを使わ

城の渡り廊下で話す一人

「 ねえ、レオ閣下」

「なんじゃ？」

「ミルヒオーレ姫殿下と距離を置いているのは何で？」

「 」

カイトの質問に黙り込むレオ

「『めん、言いたくないならそれでも構わない。でも、どうしても一人では抱えきれなくなつたら言つて欲しい。力になれるかもしれない。僕はレオ閣下の、ガレットの勇者だから』

「

カイトの言葉にレオは少し驚きの表情を見せるがすぐに微笑んでみせる

「ふつ すまぬな 着たばかりのお主に心配させるな  
どワシもまだまだだのう」

「そんなことはないよ。レオ閣下は頑張ってる。この世界に着たばっかりの僕でもそれがよくわかる」

「 そりか 」

レオは先ほどまでの険しい表情ではなくなり肩の荷が落ちたような気持ちになった

「何じやねうな  
お主の言葉にまは癒しの力があるのかのう

「

「えつ  
？」

「いや、何でもない。ワシはドーマを迎えて行く。カイトは入り口で待つておれ」

「うん、わかった」

「ん  
？」

レオと別れ、待ち合わせの場所へと向かうカイトだが、その場所には先客がいた

「おおつ、カイト殿でござるか」

「あなたは  
ブリオッシュ・ダルキアン卿、でしたよね」

そこには獣王になつた戦士達と触れあつブリオッシュがいた

「その通りでござる。名前を覚えてもらえて嬉しいでござるよ。」

「ハハハハ。ブリオッシュさんは何をしていらっしゃるんですか？」

「拙者は今まで旅に出ていた故。今、ビスコッティはどんな状態なのかをこの子達に聞いていたのでござる。」

「旅ですか。楽しそうですね」

「ニヒト笑うカイトにブリオッシュも笑顔で返す

「ハハ。カイト殿は何故ハハハ

「僕はレオ闇トヒヒで待ち合わせを」

「ハハでハヤつたか。それにしても

「はハ？」

ブリオッシュはカイトの顔から手首へと視線を動かす

「その由へ腕輪は何でござるか？」

「ハハ」

ブリオッシュの言葉にカイトは目を見開いた

「ブリオッシュさんは腕輪が見えるんですか？」

「む？？見えるでござるが みんなは見えないでござるか？」

「カイト殿の右手首に付いている腕輪が」

Γ Γ Γ ? ? ?

獣王のみんなも見えていない。エーリックは壁の柱で見えてくるのはブリオッシュだけのようだ

「ビビやうの腕輪は特殊な物であるよ」  
「うるな」

「ええ、まあ

「詳しく述べて聞かないで『じやる』よ。拙者の旅について聞いてこなかつたで、『じやる』からな」

確かにカイトは、ビスコッティが攻め込まれているのにもかかわらず今ごろになつて帰つてきたブリオッシュに疑問を抱いていた  
でも、国に関わる重要な事であれば別である  
カイトはそれを察してあえてああ答えていたのだ

「で、ですがこの腕輪は決して危険なものではなくて

「うむ。その腕輪の輝きを見ればわかるで」「ざるよ。暖かい光、見ているだけで心が癒やされるみたいで」「ざる」

「哪儿ですか」

それはアウラの祝福の光なのだろう。ということはカイトがまだ The World に帰れる可能性が残っていると考えても良いのか  
もしれない

「どうしたで、どうやるか？ そんな深刻そうな顔をして」

「あ、  
いえ、なんでも  
ん？」

ふと、地響きに似た音が城からこちらへと近づいてくる

「タルギアン卿にカイトさん……！」

「アリオッシュ、久しぶりです！！」

その正体はシンケにシンケに禮おられてしまふにかした

おお、姉様。それに黙者と

スバアアアンッ！と凄い速さでアリオッシュとカイトがいた所を通過するシンクとミルヒ

「姫様を送つてきま～～～す」

一  
行  
づ  
て  
き  
ま  
ー  
す  
！  
！

でシンセとハビは速さで駆け抜けてしまふ

「おお、あれこれなあ」

「いやいや、何言っているのですか。ブリオッシュさんも十分若いじゃないですか」

「ふふつ、ありがとうございますよ、カイト殿。それでカイト殿は何

故、準備運動を？

「僕も手伝おうかな」と

やつ置いてカイトの身体が蒼炎を纏つ

「ほう。では頑張ってくんで」

「うんーあー、もう少ししたらレオ閣下が来ると黙つから来たら説明をお願いできますか？」

「うむ、心得た」

「それじゃっ……」

カイトはやつのシンクみたいに走り出した

「あー、見つけた！」

「えー、カイトさん？」

「おおつ、カイト殿…さつきぶつでいるか、その蒼い炎は？」

後ろから追いついてきたことも驚いたが、カイトの身体に纏った蒼炎に驚くコキカゼ

「これは…」」で言う輝力と同じものと考えていいかな？」

「おお～、なるほどでござる」

「えつと、ガレットの勇者様」

「カイトで構いませんよ、姫様」

「あ、はい。えつと、カイト様はどうしてこいつ？」

「はい。僕も手伝おうかと」

「おおつ、拙者と同じでござるな」

ユキカゼもカイトと同じシンクとミルヒの手伝いに来たようだ

「ありがとうございます。でも大丈夫。もうちょっと早い走り方を思いついたので」

「えつ？」

「『紋章を通じて出力できる輝力はイメージが明確なほど確かな形と力になる』。そうだよね？」

「はい」

「じゃあいる」

「なら多分、こんな事も」

そう言つてシンクはミルヒをおんぶしたままジャノ卜ある。すると、足下にフロニヤ力集結し炎が立ち上がる

そして、炎が消えるとその姿を現した

「出来た！」

それはサーフボートの形をした乗り物だった

「おおおお、かっこいい……」

「凄いね、シンク！」

カイトもユキカゼも大絶賛

「ところ訳でユキカゼさん、カイトさん」

「『わん』は不要で」

「右に同じく」

「じゃあ、ユキカゼ、カイト。先に行くな」

「先について

？」

「姫様、しつかり拘まつててね！」

「待って、シンク。これを

シンクが何かをしようとしたときカイトが呼び止める

「? これは?」

「疲れたときに飲むといいよ。きっと元気になれるから」

「あ、ありがとうございますーー！それじゃあ、行くよーー！ブースト

ブーストからフローヤ力が噴出される

「——！」

「 ああ おう うーん。」

まづ ぶおつ！ともの凄い加速でカイトとユキカゼを置いて先に行つてしま

「はあはあ

「せぬ」

あまりの速さに啞然とするユキカゼとカイト  
さすがにあれに付いていくのは無理と判断した二人は立ち止まつて

シンクとリバヒを見送った

「それじゃあ、ユキカゼさん

」

「せつかも言つたで、『それ』は不要で、『それ』

「それじゃあユキカゼ』ちゃん』『

「それもちよつと

」

恥ずかしいのか頬をかくユキカゼ

「『めん』『めん』。それじゃあユキカゼ。僕らは城に戻るわ」

「せつで『やるな』

「あつ、ユキカゼも疲れているみたいだし。これ飲む?」

「それは先ほど勇者殿に渡していくもので、『やるね』。大丈夫なんでも、『やるか?』

じーっと瓶を見つめるユキカゼ

「うんー、ほり、この通り

」

『ぐぐぐくと飲み干すカイト。すると、カイトの身体から疲れが一気に吹き飛んだ

「ほり、元気!元気!」

元気をアピールするかのように纏つていてる蒼炎が燃え上がる

「おおっー！では、拙者も試してみるで！」ゼローーー！」

ユキカゼはカイトから瓶をもらい、その中身を飲み干した

「…………」

「え？？」

「カイト殿 騙したで！」やるな

胸を押さえながらカイトを睨みつけるユキカゼ。その表情は苦しそうだ

「そ、そんな筈は

もちろんカイトは嘘を吐いていない。しかし、もしかしたらカイト以外は毒なのかもしね

「まあ、『冗談で』やるが」

「冗談ー？」

何事もなく、ケロッといつも通りに話すユキカゼ。カイトは思わずずつじけてしまつ

「いやいや、すまぬで！」やるよ。お決まりかと思いまして

「ひどいよ、ユキカゼ

それで身体の具合は？」

「大丈夫でござる。むしろ、かなり良くなつたでござるよーー。」

笑顔を見せるユキカゼを見てほつと安心するカイト

「それで、この水はなんでござるか?」

「これは『癒しの水』と書いて名前の通り飲んだ人を癒やしてくれ  
る水だよ。僕の世界のものなんだ」

「おおつ、カイト殿も確かガレットの勇者であつたでござるな。で  
も良かつたでござるか?これは貴重なものでは?」

「大丈夫大丈夫、そんなものじゃないから」

The Worldでは誰でも手に入れることができる回復薬なた  
め、ひとつやふたつ使っても問題はない

「それは良かつたでござる」

「うん。それじゃあユキカゼ、戻ろう」

「でござる」

カイトとユキカゼは城に戻るため再び走り始めた

いや、本当にすみません

いろいろと忙しくなったく更新ができないで本当にすみません

これからも頑張りますのでよろしくお願いいたします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7979v/>

---

DOG DAYS ~ ~ ~ 蒼炎の勇者 ~ ~ ~

2012年1月5日19時49分発行